

# ステークホルダーとの対話・連携

味の素グループは、様々なステークホルダーとの対話を継続的に行い、いただいたご意見を企業活動に反映しながら、「確かなグローバル・スペシャリティ・カンパニー」としてサステナブルに価値を創造することを目指します。

| ステークホルダー        | 主なエンゲージメントの機会   | 得られた成果／実績など   |
|-----------------|---|---|
| お客様・生活者         | <ul style="list-style-type: none"> <li>● お客様相談窓口</li> <li>● 味の素(株)のレシピ&amp;コミュニティサイト<br/></li> <li>● 各種イベント</li> <li>● 工場見学</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● お客様の声をもって、製品・サービスを改善／対応満足度向上の取り組みを实践(→ P42-45)</li> <li>● 味の素グループのサステナビリティへの取り組みの認知・理解と参加者の意識の向上(→ P85-86)</li> <li>● 味の素(株)国内3事業所工場見学者数<br/>2017年度実績:約6.2万人</li> </ul>                |
| 株主・投資家          | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 株主総会</li> <li>● 決算説明会</li> <li>● 機関投資家との対話</li> <li>● 機関投資家向けのESG(環境・社会・ガバナンス)関連の取り組み説明会</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>● コーポレート・ガバナンス報告書更新(2018年6月)</li> <li>● 「味の素グループ 統合報告書2018」発刊(2018年7月)</li> <li>● 統合報告書トピックス説明会開催～R&amp;Dを通じた社会価値・経済価値の創出～(アナリストおよび機関投資家向け)(2018年4月)</li> </ul>                          |
| 取引先             | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日常的な取引の場でのコミュニケーション</li> <li>● フードディフェンス説明会・フードディフェンス監査</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 持続可能な調達、CSR調達に関する味の素グループの方針説明会開催、約370社、約600名参加(原料、包材、間接材サプライヤー向け)(2018年2月)(→ P40)</li> </ul>   |
| 従業員             | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「味の素グループWayセッション」[ASVセッション]</li> <li>● 階層別・部門別研修</li> <li>● AGPに関する意識調査</li> <li>● 味の素グループ行動規範職場検討会</li> <li>● ホットライン(内部通報制度)</li> <li>● ハラスメント相談窓口</li> </ul>                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「味の素グループWayセッション」[ASVセッション]は、2017年度末に全従業員が受講完了(→ P102)</li> <li>● 味の素グループ行動規範職場検討会開催<br/>2017年度実績:30回、297名参加(→ P139)</li> <li>● ホットライン通報件数<br/>2017年度実績:国内グループ全体71件(→ P135)</li> </ul> |
| 地域社会            | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 工場と近隣住民との対話</li> <li>● 地域のイベントに参加・協賛</li> <li>● 財団による奨学金などの活動(世界4カ国)</li> <li>● 自然災害の被災地に対する復興支援活動</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「環境モニター」制度の導入(味の素(株)川崎事業所)や各工場での近隣住民とのふれあいの場づくり</li> <li>● 被災地支援活動(→ P52-53)</li> </ul>  |
| NPO・NGO／社外有識者など | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 味の素グループ サステナビリティフォーラム</li> <li>● サステナビリティ・CSR活動に対する個別対話</li> <li>● 「食・栄養」分野で活動するNPO・NGOを支援する「AINプログラム」(※財団を通じた支援)</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 対話を通じていただいた様々なご意見を、サステナビリティ・CSRの計画に活かせるよう社内で検討</li> <li>● AINプログラムの支援実績(1999～2017年度開始分):80団体/14カ国、受益者数約15万人、総額約3億円(→ P47-48)</li> </ul>  |

## 社外ステークホルダーから寄せられた期待と提言

世界各地で異なる要請に応え続けていくために、各国・地域の有識者から、味の素グループのサステナビリティに対するアプローチ全般や、人権・環境など個別の取り組みについてご意見をいただきました。

### グローバルリーダーとなるために 解決すべきサステナビリティの課題

味の素グループの中核的なアプローチは、世界のサステナビリティの課題に適合していると思います。健康なところとからだ、食の安全・安心、食資源・地球持続性に共通する課題に焦点を当てることは、方向性として非常に正しいと思います。味の素グループの強みを発揮することで社会のニーズに応えるこれら意欲的な目標の達成は、味の素グループがどのように他の国内外の団体と連携していくかによります。

持続可能な開発目標(SDGs)を後押しし、SDGターゲットに沿った具体的な目標を立て、業界内外、政府横断のパートナーシップにおいて積極的な役割を果たし、新しい国際的な実行基準を推進していくことで、味の素グループの取り組みに対する認知と支援を得ることができるでしょう。

味の素グループの経営層はこれらの課題について自ら関与し、国際的なフォーラムで公に発言をして、メッセージを広めなくてはなりません。リーダーであるということは、自らが素晴らしい成果を上げるだけでなく、他者にも影響を及ぼす存在でなくてはなりません。



Beyond Business Ltd.  
創始者・CEO

エレイン・コーヘン氏  
(Elaine Cohen)

### 長期的視点で 味の素グループに期待すること

前述した通り、味の素グループは、人、社会、地球環境の長期的なニーズに焦点を当て、サステナビリティに関して正しい戦略と方向性を持っています。

味の素グループは、革新的な創造性と知見を活かし、事業戦略と独自の強みに沿って各方面で社会価値を創出しています。私が将来的に味の素グループに期待するのは、5年、10年、20年の長期スパンでのコミットメントをその進捗とともにより明確に示していくことです。長期戦略の一環として、明確な長期コミットメントとそれを達成するためのロードマップを、バリューチェーンの主要分野ごとに見たいと思います。これには、味の素グループが既にコミットしている通り挑戦的なサイエンス・ベース・ターゲットを設定することや、不足栄養と過剰栄養の領域で具体的な目標を宣言し、特に生活者の習慣を変えるために、味の素グループがどのような差別化を図るかが含まれます。

同時に、味の素グループが、業界連合や国際フォーラムに一層積極的に参画し、国や地域を超えた取り組みを強化することに期待しています。

気候変動、人口の爆発的増加、貧富の格差、難民問題など、様々なグローバルリスクに現代社会は直面しています。今、企業に求められるのは、従来のような経済的な企業価値の追求や顧客価値の提供にとどまりません。ビジネスを通じた社会課題の解決の姿勢は、企業にとって生き残るのに必要不可欠の要素となっています。その点から、ASVの成功は、味の素グループが新しい時代の企業として持続的に発展するためのキーとなる戦略であることは間違いないでしょう。

ただし、個々のグローバルな社会課題は、単純なものではありません。その解決策は、時として他の課題を引き起こし、また、他の課題とのトレードオフになってしまうことも多々あります。味の素グループが、真の意味で社会課題の解決に資する企業となるには、ASVの社会的インパクトを的確に把握し、見かけだけでなく、SDGsに資するような真の社会的価値を生み出していく努力が必要です。SDGsの究極の目標である「われわれの社会を変革する」一躍をASVが果たすことを期待しています。



ロイトレジスタージャパン株式会社  
取締役  
**富田 秀実氏**

業界トップ企業が負う環境に対する責任は、サプライチェーン上のCO<sub>2</sub>排出量や水の使用、森林破壊など、自社の業務の管理外にまで広がっています。このような状況の中、サプライヤーに良い影響を与えるためには、競合他社との協働や情報共有、共通価値を創造する革新的な方法など、新しい発想での取り組みが必要です。

味の素グループの活動で素晴らしいのは、主要農産物原料の一つであるサトウキビについて、サプライヤーと協力し、栄養豊富な副生物を肥料や動物の飼料として活用することにより、循環型のアミノ酸生産方式を開発したこと。これで、50万ヘクタールのサトウキビ農園に必要な化学肥料の70%をカバーしています。今後も、持続可能な未来の実現に向けて最先端の科学が必要不可欠としていることを認識し、味の素グループ全体の戦略を合わせていくことができれば、味の素グループは、低炭素社会で持続可能な成長を実現し、地球の限界を超えることなく、人々の「おいしく食べて健康づくり」に貢献するでしょう。



Carbon Trust  
取締役社長  
**ヒュー・ジョーンズ氏**  
(Hugh Jones)

食品業界のサプライチェーンでは、人身取引、強制労働などの人権侵害が発生しており、欧米の食品企業は、それらサプライチェーン上の労働・人権問題に対処するとともに、「国連ビジネスと人権に関する指導原則」に則り、人権デュー・ディリジェンスの取り組みを行っています。具体的には、トップがコミットし、トップダウンで進め、人権報告書を発行するとともに進捗状況をステークホルダーに透明性を持って伝えています。それと比較すると日本は、人権に対する認識が低く、企業の取り組みも進められていないのが実情です。2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、国内で発生している外国人労働者の労働・人権問題は国際NGOが注目しており、その対応が迫られています。グローバル食品企業トップ10クラス入りを目指す企業として、味の素グループには欧米の食品企業に引けを取らない人権の取り組みを行うこと、そしてさらにリーダーシップを発揮することを期待しています。



一般社団法人ザ・グローバル・アライアンス・  
フォー・サステイナブル・サプライチェーン  
代表理事  
**下田屋 毅氏**

安全で高品質、しかもおいしい食品は、地球すべての人たちの豊かな生活と健康の根幹をなすもの。高い技術開発力、厳しいリスク評価とリスク管理が求められます。ところが食の科学は高度かつ複雑になっており、時には生活者に警戒され誤解も招いてしまいます。そのため、事業の透明化を図り、誠実なコミュニケーションを続けることが求められています。

味の素グループの事業活動は、1908年にうま味を発見した池田菊苗・東京帝国大学教授の想いを受け継ぎ、1909年に「味の素。」を事業化したことに始まっています。これまでの長い歴史の中で時には誤解され誹謗中傷すらも受けながら研究開発を続け、世界の人々の食生活改善に向けて事業を発展させてきた意義はとても大きいと考えます。残念ながら、味の素グループは情報開示には積極的ではないという印象を受けた時期もありました。しかし、現在では世界に向けた情報発信とコミュニケーションが強化されており、例えば、10カ国語で発信している「NEWSLETTER」には、誤解を受け続けてきたグルタミン酸ナトリウム(MSG)の歴史を振り返る号もあって、とても読み応えがあります。批判を恐れず、真摯な情報発信とコミュニケーションを継続することで、世界の信頼を獲得していくことを期待しています。



科学ジャーナリスト

松永 和紀氏

## TOPICS

### 栄養に関する専門家との対話

2017年11月、味の素(株)研究開発企画部は、日米の栄養に関する専門家を招いて、「味の素グループ栄養ポリシー」「味の素グループ栄養戦略ガイドライン」についての意見交換会を開催しました。

#### 【出席者】

女子栄養大学 副学長 香川靖雄氏

ペンシルバニア州立大学 栄養生理学 教授 キャサリン・ロス氏

味の素(株)取締役 常務執行役員 木村毅

味の素(株)研究開発企画部メンバー



#### 専門家から寄せられたコメント

- 地域・年齢などが異なる様々な人々の栄養ニーズに基づき、栄養バランスを向上させるという会社の姿勢を公開し、取り組んでいるのは素晴らしい。
- 栄養素の充足だけでなく、食文化を考慮したおいしい食事を提供するアプローチが大切。不足を補う栄養サプリメントと食事の両輪で社会への貢献を期待している。これは味の素グループだからこそできることである。
- 日本では高齢者の虚弱をいかに防ぎ、改善するかが緊急の課題となっている。骨量減少の防止や筋力を維持することが最も重要であり、アミノ酸を摂るとともに、ビタミンDの摂取を米国推奨量と同等に増やす必要があると考えている。
- 米国でも、高齢者の食欲をいかに維持するかが課題となっているが、一番大きいのは肥満の問題。過剰栄養に関する研究開発に、米国から期待している。
- 味の素グループの研究成果を、米国栄養学会などでぜひ積極的に発信してほしい。